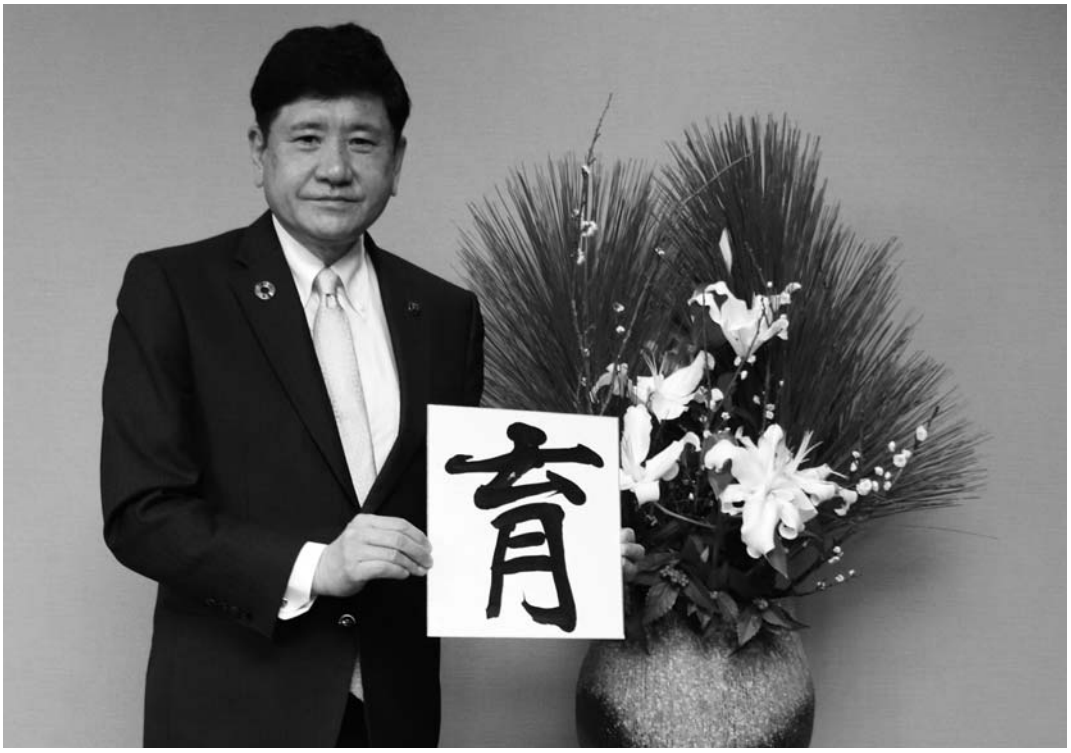
令和４年度甲府市文化協会機関誌　第44号

文協甲府

目　　次

●発行のことば　会長　樋口雄一 …… 2
●副会長 …… 3
●専門部から …… 4～10
●地区文協から …… 10～20
●事務局から …… 20～23
●あとがき …… 24

発行／甲府市文化協会　甲府市丸の内一丁目18番１号　TEL 223－7329（直通）



今年一年の想いを表す漢字を「育（イク）」にしました。
文字通り「そだつ、はぐくむ」の「育（イク）」です。
この「育（イク）」という漢字は、“女性が安らかに子を産む”姿の象形が由来となっており、「教育」や「養育」など“成長”を表す意味として用いられています。
「子育て、子育ち」にも使われていますが、子ども施策に限らず、これまで撒いてきた種を、市民や地域の皆さんなどと協力しながら、みんなで大切に「育み」、順調に成長させ、それらが立派に「育ち」、花を咲かせて結実し、夢や希望が持てる明るい未来に繋いでいきたい、そんな想いを込めて、「育（イク）」にしました。

甲府市文化協会
会長 樋口雄一

発行のことば

うららかな日差しに、春の到来の喜びを感じる季節となりました。

平素より、甲府市文化協会の役員各位をはじめ、会員の皆様方におかれましては、本協会の円滑な運営並びに本市の地域文化の振興・発展に多大なご尽力をいただき、改めて深い敬意と感謝の意を表する次第であります。

昨年、世相を表す漢字に「戦」（セン、いくさ、たたかい）が選ばれましたように、コロナとの「戦い」は、感染症者数の高止まりの状況が続く中、夏場の第七波、そして第八波では、過去最高の感染者数を更新するなど、これまでの波をはるかに上回る勢いで感染が拡大するとともに、ロシアによるウクライナへの侵攻などを背景に、原油価格の高騰や円安が進み、市民生活や地域経済に大きな影響を及ぼし、今もなお続いています。

このような厳しい状況下において、明日への勇気と希望をもたらし、心を安らかにする文化芸術の役割は大変重要であり、本文化協会においても、ウィズコロナの考えのもと、昨秋、三年ぶりとなる市民文化祭を開催し、会員の日頃の研鑽の成果となる作品展示や発表を通じて、多くの皆様に、文化芸術の魅力を満喫いただけたものと感じております。

そして、会員の皆様から寄せられました、一年間の文化芸術活動等をまとめた機関誌「文協甲府第四十四号」を、この度発行する運びとなりましたので、今後の文化活動を推進していくうえで、ご活用いただければ幸いに存じます。

今後におきましても、文化芸術活動を通じて、市民間交流を深め、本市の重層的で多様な歴史や伝統、文化を次世代に引き継いでいけるよう、鋭意取り組んでまいりますので、引き続き、皆様方のお力添えを賜りますようお願いいたします。

結びに、新型コロナウイルス感染症の一日も早い収束を願うとともに、本協会の会員の皆様のご健勝とご活躍を祈念申し上げまして、発行のことばといたします。

新しい一歩を

副会長　奥山　幾代子

令和四年度もフィナーレを迎える頃となりました。世界中がロシアのウクライナ侵攻、感染症拡大に心を痛め、気候変動による影響も日常生活に少なからず影を落とす…明るいニュースが少ない年と感じました。

そんな中で甲府市民文化祭を三年ぶりに開催できました事は、文化協会にとりまして最大の喜びと思います。

今年は何としても開催へ…と、あらゆる事を想定・冷静に一歩ずつ進む半年間でした。数年間は企画・準備を重ね最終的に中止の状況が続き、苦労も水の泡…？特にお仕事とは言え事務局の方々には、只々申し訳ないの言葉しかありませんでした。改めてこの場をお借りして感謝申し上げます。

ここ数年で時代は様変りした…と感じる方も少なくないと思います。文化に対しても「文化では食べられないからね」との言葉も…確かにその通りだと思いますが、甲府市民憲章にも「教養を高め、文化のまちをつくります」とあり、心豊かに癒しを受け過ごす事は時代が変わっても必至ではないでしょうか？制作をする方は、コロナ禍で外出しない年月は、時間を沢山与えられたのでは…人は元来怠け者だとか、空いた時間を目的を持ち過ごせただろうか？「昔は良かった」という語は使わない等々…。ウクライナの生活をニュースで垣間見ると、お洒落心を忘れず、瓦礫だらけの広場ではミニコンサートが開かれ、荒れ果てた室内の端ではバレエを踊る若者…そして人々の笑顔がありました。多くの困難の中でも屈しない精神を学び、私も五十余年前に恩師が常に仰っていらした言葉「心豊かに、腕は確かに」を微力ながら伝え繋げたいと、思いを新たにしております。

文化活動と存続

副会長　下出　祥司

コロナウイルス感染禍の長期化や高齢者化などの影響を受け、日常生活環境は大きく変わりました。文化協会の活動も他人事ではなくなり、本会の会員数をみても、令和四年度五九八四人で前年比四五五人減少しています。本年は三年ぶりにコロナ禍で制約を受ける中、第四十八回市民文化祭が十月二十九日から十一月十二日間、無事開催する事ができました。開催にあたっては会員の皆さんの前向きな気持ち、ヤル気『やってやろう』と言う気迫の強さではないでしょうか。テーマ『次世代へ　輝く文化　引き継ごう』文化の灯りをともし続けて行きたいものです。

私の所属する甲運地区文化協会の活動ぶりを紹介します。会員数は令和四年度三十五人で前年比三十八人と過半数減少となり存続の危機を実感しました。主な原因は合唱部員二十六名の退部であります。ここ二年間コロナ禍の影響で練習会場の制約により発声練習が出来なく、外出する機会も無くなり、体調を崩してヤル気が失われ、高齢化も伴ない、続けることが困難であるとの結論でありました。

このままでは地区文協存続は難しい。解決策あるのかについて話し合い、二度中止してきた文化祭に代わる事業として「コロナ船」から「絆船」に乗り換えて日帰り研修旅行を企画、中部横断道が開通したことから静岡浅間神社・賤機山古墳・静岡市文化財資料館の歴史文化見学会を実施しました。

更に、「絆船」のお陰で三年ぶりに地区文協第三十回文化祭を開催する事ができました。コロナ禍で規模縮小ではありましたが以前と変わらない雰囲気で、来場者百五十人を超える盛況ぶりで和気あいあいの一日でした。

勇気を出して新しい一歩を踏み出すとき、時代の流れで世の中の価値観や周りの状態は変わります。地域の実態を向いて歩むこと、則ち文化活動と存続の大切な「カギ」となり、必ず道は開けるものと思います。

専門部から

三年ぶりの発表会開催

合唱部
内藤保子

ホール一杯に響き渡る歌声や拍手・・・久しぶりの発表会に心が躍ります。

十一月十二日（土）に甲府市総合市民会館芸術ホールに於いて、コロナ禍でできなかった合唱部の発表会が三年ぶりに開催されました。残念ながら今回の発表会参加を見合わせた合唱団も多く、二十六団体中十七団体の参加となりました。感染者数も増加傾向にあるなか、いつもと違う形で行われました。

講師は頼まない。ステージ上では対人距離により一mではマスクを着用すること、二mではマスク着用はしなくてもよい。換気が十分できるように、挌技場でリハーサルを行いました。出演者は原則私服とし、着替えの場所は設けませんでした。検温、手指の消毒、不織布マスクの着用等感染対策をとりながらの発表会となりました。それでも、コロナ禍で練習会場の確保が難しいなか久しぶりのステージで精一杯歌うことの喜びが感じられました。

私の所属する合唱団は、「私に歌があればこそ、輝きと喜びがあるのです」と。歌うことへのエールとして、その喜びを歌いあげました。

各合唱団もそれぞれの思いを込めて三年ぶりに歌を披露し、素晴らしいステージとなりました。実行委員一同力を合わせて無事終了することができました。

今後、感染が収束して、マスクを外して自由に歌える日が早く来ることを願うばかりです。

音楽のちから

合奏部
中村まゆみ

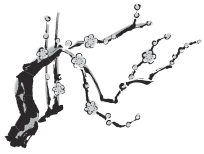
幼いころ叔母に連れられ安井和子師に箏を習い始めてから五十年となります。

振り返れば色々なことが思い浮かびます。師に連れられ県内はもとより、東京や千葉の演奏会に年に何度も出ました。演奏レベルやそれに向かう意識の高さに衝撃を受けたのを覚えています。

箏の魅力はその雅な音色にあります。華やかな中にもしっとりとした重々しさもあり、移ろいゆく日本の四季の景色によく合うと思います。

現在合奏部に籍を置いている、やまなし邦楽合奏団「響鳴」は山梨では初の邦楽合奏団です。指揮者がおり、尺八、三味線、箏、和太鼓など和楽器で合奏する和楽器オーケストラと言えば分かり易いかと思います。各楽器の持ち味を相互に理解し、メロディー部分とそれを支える伴奏部分の移り変わりを理解しながら演奏します。細かい音符ややこしいリズム等何度も練習を重ね、出来上がった時の達成感は連帯感にも繋がり、更に良い演奏を望む気持ちになれます。ここに和楽器合奏の醍醐味があります。

音楽（音楽文化）は聴く側も奏でる側も心が満たされて幸せ感に包まれます。たった一曲に元気や勇気をもらったご経験のある方も私だけではないと思います。目には見えない大きな力があり今の時代にこそ音楽（音楽文化）は必要だと感じています。そしてこの素晴らしい魅力を次世代に伝承していきたいと考えています。これからも自身が楽しむことはもちろん、伝統文化の継承に微力ながらも関わり地元甲府の文化の発展に寄与できたらと思っております。



「美しき吟剣詩舞」

吟剣詩舞道部
山本貴美子

漢詩や和歌にのせて歌う「吟詠」と、吟詠に合わせて舞う「剣詩舞」は、日本の伝統的な芸道であります。

コロナウイルスの影響により、思うように活動できず、練習もままならない状況の中、第四十八回市民文化祭が行われ、久しぶりの大きな大会で会員が練習の成果を披露出来たこと大変うれしく思います。中でも、幼少青年の発表は、響きのある透き通った、芯のある声に大きな拍手があり、将来が楽しみであると多くの方が感じたのではないかと思います。

又、コロナ禍において発表できなかった信玄公生誕五〇〇年を祝い、構成吟「郷土の英雄信玄公を偲ぶ」の、漢詩・和歌を詩舞と剣舞で舞い、「詩歌の心」を披露することが出来ました。心にしみる吟詠、勇壮精錬な剣舞の美しさ、艶やかな

詩舞、素晴らしい伝統文化である「吟剣詩舞道」を次世代へと継承していきたいと思います。

「和敬清寂」の精神

茶道部
市川宗美

新型コロナウイルス感染拡大が続く中、人と人との出会いの時間を大切にし、また飲食を伴う茶道はリスクが大きく、その活動を制限されてきました。しかし工夫することによって令和四年甲府市民文化祭大茶会を三年ぶりに開催することが叶いました。具体的には消毒・手洗い・換気の徹底、菓子は銘々皿を使用、水屋ではペーパータオルを使用するなどの感染対策を実施いたしました。

先が読みにくい不確実な時代において茶道の精神である「和敬清寂」が求められていると私どもは考えております。「和敬清寂」とは「和やかな心、敬う心、清らかな心、動じない心」を一語で表し集約した言葉です。

現在では茶道は女性の習い事という印象が強いですが、元々は武士の嗜みでした。

目に見えない新型コロナウイルス感染症と向き合う我々と武士を重ね合わせ、仏教的な瞑想法の効能もある茶道を嗜むことにより、相手に寄り添う気持ちを学ぶことも出来ます。感染対策を徹底することでお茶会など茶道の催し物が徐々に増えてきました。

人を思いやり、自らと向き合う茶道を通して、市民の皆様の毎日が心豊かなものになりますよう茶道部一同積極的に活動に尽力していきたいと思っております。

恩師へ

能楽部
野村直高

三年ぶりの甲府市民文化祭、能楽部の発表は十一月六日だと聞いた時、私は謡曲を「やっと」芸術ホールで謡えると、気持ちが高まるのを覚えた。

能楽とは、六百年以上の歴史がある伝統芸能で、能のこと。私たちは、五流の内の一つ宝生流・謡曲嘱託教授である先生方に習っている。謡本（能の楽譜・台本）を元に独特の節で謡うのである。

謡曲を始めたキッカケは十年ほど前、献血センターに行った時、佐藤章夫先生（山梨大学医学部名誉教授）に出会い、お誘いを受けたこと。挑戦することにしたが、始めの頃は何がなんだか分からず、口合わせに謡っていた。進歩が遅く成長も実感できなかったが、大会にも出して頂くなど、ご指導のおかげで、少しずつではあるが成長したことが感じられるようになってきた。そのような時、師匠の章夫先生が急逝された。

残された私たちは、先生と同じく伝統芸能の衰退を危惧されている奥様・眞弓先生を中心に稽古を継続した。謡は男声と女声では音の高さが異なり合わせづらいこともある。眞弓先生は、同門の小林尚武先生（元県立高等学校校長）に、我々男弟子三人への指導をお願いして下さったのである。

新師匠のもと、先輩方も一緒に、月二回の稽古は、公民館、悠遊館をお借りして行われていた。新型コロナ対応で会場が使用できない時は、対策をして地元の神社をお借りして毎月稽古を続けた。

毎日の練習を積み重ねて、謡えるようになったこの七月、つい半月前まで休まれることなく指導されていた師匠・小林先生が旅立たれた。（享年九十五歳）

天国の恩師・二人の先生は、文化祭発表「高砂」を聴いて、我々の成長を喜んでおられると信じている。

感謝の日々

舞踊部
和田美都里

市民文化祭舞踊発表会が令和四年十月三十日、三年ぶりに総合市民会館で盛大に開催されました。客席はかなりいっぱいになり大きな拍手の中、舞踊部、地区文協、一般参加と総勢一三〇名が日頃の成果を発揮する事が出来ました。

コロナ禍で、今までの、日常が一変し、市民文化祭が三年間開催出来ず、舞踊発表会は中止となり、他の会場での開催を試みました。今回、総合市民会館で発表会が出来た事は、本当に有り難い事だと思いました。

そして、この市民文化祭の発表会は、一人では踊る事が出来ないので、一緒に

踊って協力してくれる友達の有り難さもわかりました。また、理解し、協力してくれる家族の有り難さも同時に感じました。

コロナ禍で今まで気づかなかった事が、わかった気がします。順風満帆では、わからなかったかもしれません。

挫折して失敗して、人のやさしさにも気づくようになりました。

これからも、感謝の気持ちを忘れず、人に対して、いつもやさしく接する事が出来るように日々努力していきたいと思います。

未来へ向けて

邦楽部
原　さとみ

私の教室はまだ始めて数年ですが、ご縁あって、小学生から年輩の方までと様々な年齢の方たちがお箏を習いに来てくださっています。

子どもたちは、初めて爪を指につけ、弦にあてて音を出した時、そして弾ける曲が増えていく度に目を輝かせて、お箏が好きと言ってくれます。コロナ禍に入って、学校生活や生活環境が激変しそれぞれが大変な中でも、箏を楽しみに続けてくれている様子は微笑ましいものであり、昨今、邦楽のこれから先を危惧される話も聞きますが、子どもたちの成長に胸を弾ませている自分がいます。

また、年輩になってから始められた方たちも果敢に新しい曲に挑戦したり、お箏を通して地域の行事にも積極的に参加されている姿は尊敬に値し、私自身が元気を貰ったり、学ばせていただいている部分は多分にあります。

私のような若輩者が箏を通して地域の行事をはじめ、地域の文化祭、甲府市役所内での演奏会、甲府市の文化祭等に参加させて頂き、コロナ禍でも続けられているのは、良き生徒さんと、そのご家族に恵まれ、そして支えてくださっている地域の文化協会の皆さまをはじめ、周りの方たちのおかげだと感謝しております。

自分の好きな箏曲が、敷居の高いものという印象以上に、弾く方・聴く方どなたにとっても、身近に感じられ魅力あるものとして少しでもより多く楽しんで頂けるよう、微力ながらもこれからも頑張って活動してまいりたいと思います。

一生の宝

民謡部
伊藤　文夫

三味線の音色、情緒豊かな民謡の歌声に惹かれて、習い始め早や二十数年。

発表会、介護施設の慰問等のボランティア活動、平穏に流れてきましたが突然時が止まったかの様なコロナ禍、練習もままならない中、少しでも練習をと思い、皆それぞれ自宅での練習になり、冬の寒い時には「下へ下へと根を伸ばせ」を合言葉に、いつか発表会が出来るようになった時には、万全の態勢へと思い、頑張ってきました。ようやく徐々に発表会もできるようになり皆の目も輝いてきました。

令和四年甲府市民文化祭発表会も堰を切ったかのように沢山の曲が発表されました。

又、以前のように介護施設慰問等のボランティア活動が、活発にできるように成ることを願っています。生活にも彩りができ、もう、ウイズコロナでの生活の心構えができてきたように思えます。

生涯学習都市宣言の一章に「風に聞くときの流れ」とあります。正にこれからもどんな風が吹いて来るかわかりませんが、順応しながらの生活になるのではないでしょうか。

上手でなくてもいい、永く続けるということは一生の宝です。文化の火を消さないためにも。

「一年の学び」

洋舞部
三井　環

コロナ禍に加え、世界情勢が大きく変化する中、皆が今まで以上に強く、優しく、逞しく前に進まなければいけないと感じます。音楽や踊りの世界に触れ、喜びや安らぎ、豊かさを感じる事は、その為の大きな力に繋がる！という思いを一つに、会員一同、本年もバレエの舞台が、より良い形で継承されて行く事を願い活動して参りました。

八月、市の芸術ホール設備使用に関しての心配や要望をお伝えし、生命を最優先に事業を進める行政の在り方をお聞きする機会を頂き、共に生きる社会の一員として、芸術・文化の存在価値を見出していくための努力が必要と思いました。

九月、新たな試みとして

「夢・目標に立ち向かう自己肯定感を育てよう」というテーマで、指導者、保護者、学生達に向けたメンタルトレーニングの講習会を行いました。

子供達の現状に対するメンタルサポート、学業との両立、パフォーマンス向上の為に出来る事、という内容でしたが『脳』についての知識を学ぶ事となりました。

十月、県民文化祭参加の舞台を開催、コロナ禍以降のマスク生活、運動不足による体力の低下、ネット依存等、社会を取巻く様々な環境の変化が体と心、体力や感性に少なからず影響を及ぼし、舞台当日迄の体調管理だけでも大きな負担になっている様に感じました。今は花束等の受け渡しも廃止となり、頑張って踊ったご褒美に花束を胸に抱く姿もありません。そんな中、来場者アンケートで多くのお客様が〝良かった・次回も観覧したい〟と回答くださった事は何よりの喜び、励ましとなりました。

時代の変化を受け入れ学び、本当に大切な事を皆で確り考えて進まねばと思います。

文化祭を終えて

華道部　深澤理真

コロナ禍ではありますが、今年は三年ぶりに甲府市民文化祭華道展が十月二十九日より開催されました。

開催にあたり、密を避けるためにはどのように活け込みをしたらよいか、また、会場の席割等、コロナ禍でも安心安全に文化祭を開催するために皆さんと何度も話し合い知恵を出し合い決定した昨年の開催事項に基づき準備を進めてまいりました。

文化祭前日より会場の準備を始めましたが、皆さんの段取りの良さに、同じ気持ちで開催へ向けて心を一つにしてくださっているのだと改めて感じました。

午後より本格的に活け込みが開始され、作品は各流派別に企画したテーマの花が活けられました。また地区文協の方々の作品も展示されましたが、華やかで文字通り会場に〝華〟を添えてくださいました。

コロナ禍では情報交換を行うのも難しく、それに加えて行動も制限されることが多かったため、稽古をすることも大変だった中、皆さん一人ひとりが研鑽を積んでこられたことと思います。そんな中でも、ご来場して頂いた方々に「花は癒されますね」とお声をかけていただけたことですべて報われた気がいたします。

今回の文化祭で感じたことは、生け花は準備から始まり、活けて鑑賞をする、その中で花に向き合い知らず知らずのうちに心を豊かにし、そして元気をいただけるものだということを久しぶりに感じることができました。

改めて一本の花の力に感謝すると共に、私はこれからも楽しく稽古を積み、歳を取っても華道を続けていきたいと感じた文化祭となりました。

まだコロナ禍ではありますが、来年も文化祭が開催されますよう願っております。

文化祭賞を頂いて

工芸部　大野和子

この度は、立派な賞を頂きまして、大変嬉しく思います。有難うございました。

この作品を描くにあたって中山先生の丁寧なご指導があっての賞だと感謝しております。

振り返ってみれば、トールペイントの教室に通い始めてから十五年ほどが経ちます。始めたきっかけは、素敵な作品を拝見して、私もこんな作品を描けたらと思い、先生の教室に見学に行ったことです。

大勢の生徒さん達が、熱心に楽しそうに作品に取り組まれているのを見てすぐに私もやってみようと思いました。

それから一つ一つ作品を描いて段々と仕上がっていく過程がとても楽しく、おもしろい作業となっていきました。

十五年もの間の作品は、どれ一つとっても一生懸命仕上げたという満足感があります。どんな下手な作品であっても私にとっては大事な宝物となっております。

最近は、年齢のせいか細かい所の作業が大変になってきました。やめてしまうのは簡単ですが、続けていくのも大変だと思います。

これからも元気でライフワークとして続けていければと思っております。

撮影記行

写真部　坂本香一

コロナウイルス感染に脅かせられて三年、まだ感染が収まっていませんが、水際対策で緩和され地域の行事、イベント等が各地で開催をされている様です。

第四十八回の文化祭が三年振りに、ようやく開催出来る運びとなり、写真部もこれから検討して順次実施して行きたいと考えています。コロナ禍のなか、今年の五月中旬、久しぶりに写

真を撮りに行きました。甲府から車で二十分、甲斐市岩森茅ヶ岳広域農道沿いのJA梨北双葉支店、向かいの「岩森花畑」で一面に広がる約六千六〇〇平方メートルの見頃を迎えているポピー、見事に花が咲き誇って赤、ピンク、青、白色等で畑を覆っていました。

毎年地元の老人クラブで、遊休農地に花畑を整備している。との事、周辺は富士山や南アルプスが望め、花畑を埋め尽くす光景の中、青空の下散策しながら周辺の住人や、通りかかった人たちが足を止めて眺めている色とりどりのポピーの花を楽しみ、大勢の人達が携帯電話などで撮影をしていました。その後、コスモスは毎年十月中旬頃には見事に咲いていましたが、今年のコスモスは遅いのか、咲きかたもまばらでした。もう少し経つと、きっと、コスモスの綺麗な花が見られる事でしょう今から楽しみです。

甲府市文化協会 書道部に入部して

書道部 石原美歩

昨年コロナ禍の中、甲府市文化協会書道部に入会いたしました。私の会「歩会」は月に一回北東公民館多目的ホールを使用して練成会を開催して県内外の展覧会に出品しております。

今年初めて甲府市民文化祭展示部門に参加いたしました。趣味で尺八をしており、合奏部の発表会に参加しておりましたが、本業の書道の参加は初めてだったので、分からない事が多かったのですが、部長の矢崎先生に導かれながら無事に展示部門を終了する事ができました。

各ブースを拝見しながら、バラエティーに富んだ作品の数々、それを制作した人達の熱意に感動いたしました。私の会の展示の前で、「初めて見る会だね、いい作品だね！」とお褒めの声をいただき嬉しかったです。

私事ですが、今年の「毎日書道展」で最高賞の会員賞をいただき、樋口雄一市長より祝電をいただきました。ありがとうございました。

書を始めて半世紀、来年は「歩会」の社中展を開催いたします。これから、甲府市文化協会書道部、山梨の書道活性化のために邁進していく所存でございます。よろしくお願いいたします。

水石との出合い

水石部 大野浩伸

水石（山水景情石）との出合いは、平成二十九年五月に所用で、甲州市塩山を訪れたとき、武田信玄公の菩提寺である「恵林寺」での山梨県愛宕会主催による「第六十五回水石展」との出合いです。

会員より、一石ごとに鑑賞方法等について細部まで説明をいただき感銘し、又後日、会の勉強会に出席し、自然の一個の石で種々の山水景情が表現できるところに、水石趣味の良さがあり入会したのが始まりです。

今回の「第四十八回甲府市民文化祭」において、私の出品石（釜無川の滝石）が、文化祭賞をいただきました。誠に身にあまる光栄のいたりです。

この賞をいただいたのも、多くの方々のご指導の賜物と感謝いたします。この喜びを胸に決意を新たに、甲府市文化協会水石部の発展に微力ではありますが、切磋琢磨し努力する所存です。

会の存続

美術部 保坂昇

私の所属する「集団アトリエ」という油絵の会が創立したのは昭和五十四年ですので、四十三年続いているご長寿な団体です。山梨美術協会に所属されていた（故）鈴木農夫男先生を講師とし、甲府市内にあった画廊アトリエでの絵画教室が母体でした。

会の皆さんは鈴木先生の風景画に魅了されて入会し、毎年自分たちの作品展を県民会館地下ホールや県立美術館で三十九回開催を続けてきました。それがコロナ以後できていません。会員は年々高齢化し減少しています。活発に写生していた頃は各々車で集合しましたが、今は免許返納などで、乗り合わせて行くため、コロナ発生以後、車の中は感染リスクが高いので行けなくなりました。

今年三年ぶりに甲府市民文化祭が開催されました。いつもなら、教室に会員がそれぞれ作品を持ち寄り、和気あいあいと「ここの色は変だ」とか、「形が違う」などと批評しながら、より良いものを制作していく過程があったのですが、今回は個人での孤独な作業でした。

久々に筆を執り出品したのですが、展覧会には、描いた絵を出品する喜び、見てもらえる喜び、批評してもらえる喜びがあることに改めて気づきました。そして何より、次はもっと良い作品を作成しようという意欲が沸き上がりました。長く続いている「集団アトリエ」は会の存続をかけ、コロナと共存していかねばならないと決意を新たにしたところです。

雑感

文学部
数野徳子

詩人で作詞、童話や翻訳と多彩に活躍されている谷川俊太郎さん（九十歳）の記事を読みました。最近刊行した詩集は「虚空へ」と絵本「ちちんぷいぷい」があります。「虚空へ」は、一編が十四行の短詩を八十八編収めてあり、言葉の氾濫に小さな杭を打つ気持ちで書いたそうです。

谷川さんが丁寧に一編ずつ朗読する動画を見て、日常を大切に思い言葉が地面から湧いてくるひらめきを感じました。同じことを繰り返す中に感動を発見し、私も心に響く詩を書きたいと思いました。全ての美しいものに出会うような、そんな詩が書けたらどんなに良いでしょう。

先日、太平洋戦争で若くして命を落とした画学生の絵を集めた美術館（長野県にある無言館）を紹介する番組を見ました。若い女性を描いた作者は、太平洋戦争で戦死した二十代の青年で、絵のモデルとなった女性が作品と対面し、心境をノートに綴りました。吉永小百合さんがその思いを朗読したのを私はただじっと聞いていました。短い間でしたが若い二人は小さな幸せの中にいたと思い、胸一杯になりました。画学生を偲んで詩を書きました。

交響曲

「もっともっと描きたかったのに」
あなたの声が響いている
忘れないで　忘れないで
あの夏
あの日の夏を忘れない
君を愛した証は
この絵画と共に
オーケストラが奏でる運命
青春の一場面は
愛と哀しみを連れて
消えてしまった

すみれに魅せられ

盆栽部
小泉泉

数年前より世界的に拡大感染したコロナウイルスは収束の兆し未だ見えず、様々な予防対策が行われている。

我々山梨スミレの会員は休みなく月一回の研究観察等の発表、意見交換を行っている。野外観察で今回は奥秩父、大弛峠方面の探索であった。会員は三台の車に分乗し、山梨市牧丘から大弛峠頂上迄、車でも行ける日本最高所の林道で、途中サクラスミレ他、たくさんのすみれを観察した。峠の頂上には、野性の自然庭園があり、少し下ったところより西へ北杜市、高根町清里迄森林地帯を抜ける北部山岳ルート「クリスタルライン」全長六八、一キロがある。大弛峠の手前道路に並んで、山の緩い斜面には黄色の花、普通では考えつかないキバナノコマノツメの大群落があり、その姿のすばらしさに大感激をし、長い時間眺め、写真を撮って過ごした。

過去野山ですみれの群落を眺めたのは、清里のサクラスミレと駒ヶ根千畳敷カールのキバナノコマノツメ等であった。

ハロー山梨演劇塾ＹＡＹＡＹＡ 演劇活動のご報告

演劇部
藤谷清六

コロナ禍自粛中につき、どこかの劇場で公演するということを三年間自粛して参りました。ご報告することは特にありませんので、近年のご報告をさせて頂きます。

二〇二一年七月には『銀杏酒場』という短編映画を制作いたしました。

同年十月には、甲府東光寺において石牟礼道子さんの朗読劇『苦海浄土』、十二月に南アルプス市桃岳院にて演劇『苦海浄土』を上演いたしました。

二〇二二年八月にはハロー山梨稽古場にて『お家へ帰る人々「父逃げる・息子逃げる・花子の壁」』の三部作を上演いたしました。

いずれにしてもコロナ禍のため、人数制限はもちろんのこと、コロナ対策を万全にして上演いたしました。本年につきましては、目下予定はありません。

なお、これら全八公演はフェイスブック、Ｙｏｕ Ｔｕｂｅにて配信されています。どうぞご覧になってください。

地区文協から

文化協会の運営

琢美地区
深澤芳次

今年は、「ミニ文化祭」ではなく文化祭として開催しました。

それは、文化協会の会員があまりにも高齢化し、文化祭の準備の出来ない年齢になってしまった事にあります。昭和五十年代の開設当時の意気込んだ当時とは大きく違う事にあります。

従来の文化祭開催には、準備で机やパーテイションなど一つの什器を移動するにも、会員ではできなくなりました。

そこでコロナ禍にかこつけ「ミニ文化祭」を開催しました。市立図書館を利用させて頂き、今後は会員の体力に合わせ、開催運営を踏まえて規模を縮小して、手を掛けずに開催できるように、そして高齢者が参加しやすく、気軽に文化活動を楽しめるために「ミニ」を取って『琢美地区文化祭』の形にしました。

各地区ではどのような活動・運営・持続するための文協をお考えでしょうか！

文化協会の必要性・主旨・使命を考えてみました。

市民憲章に書かれています。

『教養を高め、文化のまちをつくります』

この求める処は
明るい
楽しい
住みよい

そして　栄えあるまちをつくります

と書かれています。これは全ての市民が参加のもとで築き上げる文化が不可欠であるという事です。

とかく、文協会員の中には、自分の趣味を生かす場所のみのように捉える方も居られ、協会への参加者を制限するようなお考えの方も居られるのではないかと思える発言を聞きます。

地域においても、文協への助成金を頂き、甲府市文化協会そのものも市民からの助成を受けているのですから、文化事業は最大限門戸を開き、市民の行うどんな文化活動も参加できるようにする事が、時代に則した協会づくりではないかと思います。

従来に拘らず開けた文化を推し進めたいと思います。

千代田地区 文化祭について

千代田地区
末木幸造

千代田地区文化祭は、例年ですと小学校との共催で十一月上旬に開催され多くの皆さんにご参加をいただき、午前中は小学校の部「チヨダオータムフェスタ」とし、児童による一分間ス

ピーチ、学年ごとの学習発表会などの催し物が行われ日頃の学習や活動を発表することにより地域の方々に千代田小学校の様子をより一層理解していただく機会としています。

午後の部は地区文化祭として、千代田小学校と地域の皆様による展示部門と発表部門に出品・出演が催しされました。以前千代田地区は九部門の専門部がありましたが少子高齢化が進み、現在の主な部門は、詩吟・美術写真・盆栽・舞踊の四部門となり、参加・出品していただける方も年々少なくなりつつあります。

このような地域事情のなか、令和二年・三年と千代田地区文化協会の活動は、新型コロナウイルス感染拡大の波を受け、感染防止の観点から千代田地区文化祭も中止になるなど例年どうりの開催が出来ない状況が続いています。今年度の文化祭も、新型コロナウイルス感染症第七波による急激な感染拡大が続くなか、役員会を開き文化祭の催しについて討議した結果、コロナ禍のなか感染の予防対策や参加者及び役員の安全・健康を考慮し、文化祭を中止とする結果となりました。

今後の地区文化祭開催について、三年間のブランクや高齢化が進むなど次期課題は山積みではありますが、地域の皆様には様々な趣味を楽しんでいる方が沢山いるかと思います。一人でも多くの参加・出品のご協力をお願いし文化芸術活動を通じて自分の感動や願いを表現し、地域の皆様とのコミュニケーションの場とし地域社会の連携を強めていただけたらと思います。

「一人ひとりが文化の担い手として」

里垣地区
福田勝子

この言葉は、里垣地区前会長の日頃によく聞く言葉でした。

里垣地区では日頃より老若男女を問わず、地域の連帯の中各々の部門での活動を盛んに行っており、地区文化協会主催の文化祭には地域の多くの皆さんのご参加の中それぞれの部門の発表との場となっております。

又、「地域のふるさとまつり」の一環としての行事の催しにはそれぞれの部門に参加しております。又、青少年団体との交流、地域小学校との茶道教室、障がい者との交流と、明るい街づくりへと深く広がりを見せております。

文化活動は自らの研鑽と交流を通して明るい家庭づくりに安らぎがお互いに認め合い、高め合う文化活動の担い手となれば幸せなことだと考えます。

終わりに里垣文化祭は令和元年に四十回を開催し、その後二年、三年と新型コロナによって中止となり、四年度の文化祭の日程は左の通りと決定いたしました。

第四十一回文化祭
日時　令和五年三月十二日㈰午前九時開会
場所　里垣悠遊館
発表の部
詩吟、コーラス、フォークダンス、3B体操、茶道
展示の部
盆栽、写真、書道、手芸

来年は発表の場を

貢川地区
加々美実

もう三年になります。コロナの感染状況など何かと制約を受ける中、地区文化協会のみなさんがそれぞれに工夫しながら個々に、またはグループで向上心を持って文化活動に取り組まれてきていることを聞いていましたので、今年度は文化祭を開催しようと思っていました、しかし思ったほど感染状況もよくならず、自治会連合会とも相談をして今年度も地区文化祭の中止を決めました。

これからはウイズコロナで生活して行かないとも言われてます。そういう事に先取りして取り組まれたのか、市をはじめ市内では十六もの地区が文化祭を行われました。

日頃文化活動をより多くの人に知ってもらい、一緒に楽しんでもらえるようにと努力している皆さんの発表や展示のできる場を作って行きたいと思っています。

文化協会会員をはじめ、自治会連合会や学校ともよく相談しながら、文化祭をどのような形ならできるか検討して開催に向けて努力して頑張りたいと思います。

和太鼓との出会い

千塚地区
西山敏人

団塊世代と言われながら見向きもせず仕事一筋に趣味なく退職したある日、地区青少年育成会役員の大先輩の誘いで和太鼓練習会を見学し、子供の頃から良く聴いた迫力のある「ドーン・ドーン」という和太鼓の壮大な音に聞き惚れ、それ以来早約八年を迎えました。

この三年間は誰もが想定外と言えるコロナ禍で基本対策である「三密対策」のため、全ての練習が中止となり疲弊の毎日でした。

やっと十月上旬から対策緩和でマスクを着けての練習が再開でき、楽しく喜び合えるこの頃です。

練習を行う毎、他部の皆

様も同様と推察しますが歳も重ねた三年間のブランクが如何に大きかったか身に沁みます。

「ツク ドン・ツク ドン・ツク ドンドン・ドド ガドドン…」

とシンプルな調子で打つ「三宅木遣り太鼓」は地面近くに横置された和太鼓をスクワット運動の様に腰を落とした姿勢で真横から水平に打ち込む独特のフォームは日本中でも極少ない打ち込み姿であると思います。又、打ち込み中に、他の人達が腹の底から大声で唄う「甚句や木遣り」は格別で元気の源です。

自分自身、三宅太鼓はストレス解消と、又、健康維持への一番の無料サプリメントを購入したと思って居ます。

まだまだ終息には先が見えない状況化ですが、油断せず予防接種と三密の基本対策を厳守して「コロナ禍」が一日も早く終息する事を願いつつ、仲間達と心置きなく力一杯大声を出し、音と心を合わせ掛けがえのない伝統文化の継承活動を続けたいと思っています。

私と「文協」

相川地区
山　嵜　久仁夫

現在、地区文化協会の役員として活動していますが、私にとって文化・文芸は今まで一番縁の遠いものだと思っていました。あるとすればクラシック音楽を聞く事と自治会での伝統行事である獅子舞の舞い手として参加している事ぐらいでしょうか。そんな私がいざ地区文協の役員になったものの丁度「コロナウィルス」の感染拡大と重なったため、予定した行事のほとんどを中止しなければなりませんでした。

特に地区文化祭は令和三年度、令和四年度とこの二年間前向きに検討してなんとか開催したいと思いましたが、感染拡大の波に飲み込まれて中止せざるを得ませんでした。各専門部の皆様にとっては開催に向けて作品の「作り」「歌い」「詠み」「舞い」に取り組まれて地域の皆さんに日々の成果を観て頂けない寂しさや切ない思いがある事を感じるだけに、執行部として最後まで開催の判断に苦しみました。

文化・文芸そして芸能は先人たちの残してくれた伝統を守る縦糸と、今を生きる私達の智恵による創意工夫の横糸によってできる丈夫で美しい織物のように私は思います。だからこそ見る人、聞く人に深い感動と心の豊かさを与えてくれる大切なものだと強く感じます。

まだまだコロナ感染が続きますが、少しでも収束に向かい次年度の地区文化祭が役員・理事を始め地域の皆さんの温かい協力を頂いて開催できるように盛り上げていきたいと思います。

東地区文化祭開催

東地区
牛　山　和　子

東地区文化協会は、毎年文化祭を甲府市総合市民会館で開催しています。退職後の自由時間に、趣味を増やした私は、歌謡曲部に入れて頂きました。毎回練習日は先輩方の歌声に心地良い時間を過ごしていましたが、まさか芸術ホールで発表とは！他部門の発表者や展示部門も素晴らしく、地域に疎かったと改めて自覚しました。

三年前会計を受けた途端のコロナ禍！令和二年度は早い段階で文化祭は中止が決まり、三年度は準備を進めるも感染拡大のため断念。ようやく開催された今年の文化祭！三年振りの十月八日、九日の第三十九回東地区文化祭は、私にとって初めての事ばかり！

感染防止対策を徹底した上での開催は、会長はじめ役員先輩方、部員、関係者皆さん緊張の中にも無事終了する事ができました。

二年間のブランクは、会員の日常生活や部活動が制限されるなどの不自由な反面、文化活動の必要性も再認識されたと思います。

今までと同じようには出来なくても、工夫しながら出来る事を今年の文化祭で改めて学びました。今だに続くコロナ禍の日々は、会合自体注意が必要で、各部の活動も様変わりしています。

今年の文化祭特別公演は、甲斐清和高校音楽科にお願いしました。見事な演奏に、感動したとの感想が寄せられました。

地域の小中学校にも参加していただけるような活動を提案された先輩の意見は多くのかたに共感され、文化協会の発展に生かされると思います。

日本文化の伝授

国母地区
下　條　とみ子

一旦収まりかけた新型コロナウィルス感染者がまた増加気味の中、第四十八回市民文化祭「次世代へ・輝く文化・引き継ごう」がスタートいたしました。

このところ二～三年、コロナ禍で私たちの生活様式もテレワークと急速なＩＴ化の中、人との繋がりが軽薄になりつつあり、また気

候の温暖化など、想定外のことが何かと起きております。

その中で、こうした文化活動ができることは喜ばしいことと同時に、実行委員会の皆様のコロナ対策をはじめ、ご尽力に感謝いたしております。

私も三十代の頃より、東京の家元先生のご指導のもと、永年、邦楽をお稽古して参りました。国立劇場を始めいろいろな会場で演奏し、帰りが遅くなると先生方とビジネスホテルに泊まり、着物を着替えてホッと一息したものです。

文化活動もだんだん高齢化し、若い会員が増えない中、邦楽の将来に危機感をもっております。

日本の文化は、風土とともに日本人の知恵で長い時をかけ作り上げたものです。

これからも次世代へ引き継ぎ、日本文化を大切にして参りたいと思っております。

写真は、以前、国母小学校に伺った時の様子です。

両親の教え

山城地区
二宮　文子

私は、山城地区文化協会の俳句部に入部して早十八年。町の責任者として十三年やっています。私の出身地は、日本一小さな町、南巨摩郡早川町です。自然豊かな環境で育ちました。隣近所、仲が良く助け合い精神は、当たり前の事でした。私の両親は、他界してしまいましたが、両親の教えとして「皆さんのお役に立つ事をしなさい」と言って父は、一生懸命、町内のためにありとあらゆる事をやってきました。母は、慎ましく父を支えてきました。

子供の頃、将来私は、どんな人生を歩むのか楽しみでもあり不安でもありました。甲府の高校を卒業し二十五才で結婚しました。この地が山城地区だったのです。農家に嫁ぎ祖父母、両親を看取ってきました。友達の勧めで趣味として俳句を現在までなんとか頑張っています。山城地区の町民は、「パワー！元気！やる気！」のある人が多く私は、圧倒されてしまいます。

山城地区の住民も若い人達が、家を建て町の雰囲気も変わりつつあります。そんな方達に私から明るい声をかけ、若い人達との交流を深め、この地区に来て良かったと思っていただけるように、心掛けたいと思っています。そして、時期が来た時に山城地区文化協会に色々な部門がありますので「入部してみませんか」と声をかけ、一緒に前を進んで行けたらいいなと思っています。

人生にとって趣味をひとつ持つ事でも生き甲斐を感じ、仲間とのふれあいによって暖かい気持ちにもなれます。「ぜひ仲間を増やしましょう。」「文化を大切にしましょう。」の思いを胸に、日々努力しております。

コロナ禍でも合唱部の取り組み

穴切地区
末木　民子

コロナにより中央公民館での合唱が出来なくなって三年目、当時唄えないのなら休部もやむを得ないという意見が大半でした。私もその一人でしたが、高齢の方から行くところが減り、ここに来るのが楽しみなので続けて欲しい、先生からも休部にすると再開は困難なので、どんな形であっても続けた方がよいとのアドバイスがありました。少人数でも続けることに同意し、まとめ役をしております。

先ず取り組んだことは、先生がピアニカ、CD持参、小声のハミングで歌いましたが、注意され中止。次にCDを使用しながら裏声の出し方、プロによる童謡を聴きました。しかしこれもワクチン会場になる予定とのことで一階への移動。ここは防音装置がないためCDも許可されませんでした。この際各人の思いを出し合う時間にしました。参加者二人の時もありましたが、先生はいつも参加してくださいました。

文協理事会で様子を伝えますと、公会堂管理者の方から飯田公会堂のお誘いがあり、昨年六月からお借りしています。会場はキーボードがあり、周りは自然豊かな環境です。六名の新しい仲間を迎え現在十二名です。マスク着用で十分な発声も出来、思う存分楽しく唄っています。中央公民館に近い方々が多く、送迎してくださる方にお手伝い頂きながら参加の方もいます。二時間の中に手話の指導や九十五歳になられる先輩の経験話を伺ったりして過ごしています。年齢の差があっ

ても有効に時間を使って楽しいです。各自みなさんの持てる業や力を出し合って仲間作りをしていることは、コーラスを通しての大きな力でもあると思います。これからも参加者を増やしてコーラスの会を育てていきたいと思います。中央公民館も十二名まで使用できるようになりましたので検討していきたいと思います。

第三十六回 文化祭を終えて

玉諸地区
戸澤清茂

第三十五回文化祭が滞りなく終了して三年が経過しました。新型コロナウイルス感染症が世界規模で蔓延し、ウイルスが日本列島を駆け巡った。同じく甲府市においてもコロナ対策が十分に行われていて文化祭を実施するには困難な状況が続いています。このような中で、二年間は新型コロナウイルス感染症の変異株が発生し、なかなか実施に踏み切ることができずにいたのです。玉諸では、各町の自治会長さんを中心とする常任理事、専門部長、文化部長、各町理事さんの集まりの理事会で協議をして文化祭の実施を検討しました。全国的にコロナワクチン接種が始まり、医療用の特効薬も開発されています。このような中で、コロナ禍であっても感染対策を徹底することで実施が可能であるという方向性が見えてきました。甲府市内の今年の文化祭の実施状況を見ると、半数の地区の文化協会は中止に踏み切り、残りの半数は規模を縮小して実施することを決定しました。玉諸は時間短縮で第三十六回文化祭を実施に踏み切る方向に進んだのです。

さて、文化を改めて問い直してみる。世の中が開けて生活水準を高める状態にするとか、人類の理想を実現していく精神の活動とか、技術を通して自然を人間の生活目的に役立てて行く過程で形成された生活様式およびそれに関する表現であると言われています。振り返れば、わが玉諸文協は昭和五十九年に誕生してから今年で三十六年目を迎えます。この現状を踏まえ、専門部の活動はコロナ禍の中で継続して行く意見が大勢を占めたのです。来年度もこのような状況は甲府市内の全文化協会の共通の検討課題となるでしょう。

結びになりますが、これからも文化祭や文化活動を通して地域に貢献できる活動や安心安全な社会、住みよい玉諸の町づくりに努めることが最も大切になります。文化祭を通して、玉諸の歴史・文化活動の一端を発見していただく機会を地域の皆様と一緒に作っていきたいと考えます。

コロナ過の文化祭

新紺屋地区
長田幸也

未だに収まろうとしないコロナウイルスですが三年も立つと鈍感になり、注意力もうすれてしまいます。

令和四年度コロナ騒動も少々落ち着いてきた八月に文化祭の実施を決断、コロナ過でのルールの厳守と規模も縮小し行う事にしました。

三年ぶりの開催で住民の関心度が心配されましたがまずまずと、言うより待ってましたと言わんばかりの関心度を発表部門、展示部門を問わず予約され、特に発表部門は抽選するありさま、選択に苦慮するありさま、文協甲府四十三号に掲載された通り各部門それぞれの地道な練習の成果であるようです。

発表部門では、出演者、観覧者同士の会話も一段と賑やかな雰囲気、久しぶりに顔を見合わせ、会場は、皆でワイワイ、ガヤガヤ、主催者慌てて「みなさ～ん大声を控えてください。」等など・・・、心配です。近所なのにお久しぶりね～、出歩くきっかけも少なくなり毎日がつまらんよねえ～、早くコロナから解放されたいよね～。

展示部門は、二日間に渡る開催でさほどの混雑もなくスムースな状況の中それぞれの作品も一段と磨きがかかってきたように思いました。

心待ちしていた文化祭、三年間のブランクは大きいです。コロナの終息を見据えて打ち込み、より一層作品に磨きをかけてほしいものです。

大盛況だった『納涼盆踊り会』

朝日地区　伴　賢二

八月十五日、朝日小学校の正門前広場で三年ぶりに『納涼盆踊り会』が開かれました。コロナ禍で参加者が少ないのではとの心配は見事に覆され、受付が始まる前から続々と地域の皆さんが集まり、受付を早めました。

自治連服田会長、朝日小弦間校長のあいさつのあと、盆踊りが始まる頃には、会場が一杯になるほどでした。民生委員・児童委員協議会の皆さんによるかき氷は大変好評で、カップが足りなくなり、途中でカップを買いに走りました。舞踊部長の伊藤さんの手づくりワッペンが子どもたちに配られ、一〇〇個寄付していただきましたが、子どもたちは大喜びで、「こんなの貰って良いの」の声が上がり、失くしたと言って泣き出す子が出るほどでした。一人宛一個配って二、三個残っただけでしたから、子どもたちの参加がたいへん多かったです。浴衣の子どもたちの可愛いい姿が目立ったほか、家族総出の方や、若いカップルの参加も多く見られました。外国人の参加もあり、とても上手に踊られ称賛の声が上がりました。

炭坑節、武田節、甲府大好き音頭、よっちゃばれ、ビューティフルサンデーの五曲を繰り返しながら踊りましたが、最初は戸惑っていた初心者も伊藤さんの呼びかけで踊りのふりをおぼえ、二、三回繰り返すとすっかり覚えてしまいました。全体では、一五〇名以上の参加があり、大変盛況で、「やってよかったね」との感想が多く寄せられました。予定の、八時を回りましたので、文協副会長石丸さんのお礼の言葉で締めくくり、最後名残惜しいくらい盛り上がった盆踊り会でした。

その流れが十一月に行われた地区の歩け歩け大会の盛況ぶりや、二五〇名以上の参加で成功した秋の文化祭に繋がったとおもいます。

文化祭中止やむなし

富士川地区　菊地　健

令和四年度富士川地区文化協会の活動は他地区と同じように、新型コロナウイルス感染症の消長に大きな影響を受けている。

地区文協の最大イベントである文化祭も一昨年から開催できていない。しかしながら新年度に入って以来、一時は三〇〇人に近づいた山梨県の新規感染者数も、六月になると二桁に下がった。ワクチン接種も一般化し、世間でも「withコロナ」やら「経済の復興」などが口の端に上るようになり、当地区でも今年こそは文化祭を開催しようと意気込んでいた。しかしこれまでの在り方ではいけないという立川会長の強い考えがあり、新しいサステイナブルな「コロナ禍の文化祭の在り方」もあれこれ話し合っていた。

地区文協傘下の各部の中には、コロナのせいでまったく活動ができなくなっている部もある。それらは主に一か所に集まって座って活動する部や、文化祭での展示を目標に作品を創作する部などだ。一方、地元悠遊館を利用して活動する部の多くは、普段と変わりなく集まり練習している。そういう部は一年の成果を披露しようと文化祭での発表の機会を心待ちにしていた。

ところが、役員会を予定していた七月に入ると新規感染者数が再び一〇〇人を超えるようになり、それが半ばには三〇〇人、四〇〇人と増えていった。役員会当日の二十一日に近づくと二〇〇人に減ったので、文化祭開催も可能かと思ったが、前日の二十日にはまさかの一〇〇〇人を越え、話し合いの結果、今年も文化祭開催は断念せざるを得なかった。超々高齢化地域の当地区を考えると、致し方ない結論だった。

最後に余談だが、長年当地区文化協会で活躍されてきた、顧問・前会長の甘利陸好氏について一言。氏は不幸にも交通事故にあわれ、その後様態が思わしくなく、協会の活動から退かれた。甘利氏は郷土の歴史に通暁し、地区のどこを歩いてもたちどころに周囲の歴史を語りだし、その談、止まるところがなかった。当協会の記念誌には、富士川地区の様々な場所についての詳細な歴史を物とされ、貴重な資料となった。書くことも話すことも不自由になられた由。会員一同、その知識の発露が失われたことを残念に思っている。

地区文化協会の課題

相生地区　雨宮　秀

今年の相生地区の文化祭は、十一月六日を予定して早くから会場の旧相生小体育館を仮予約していたが、市の教育委員会の使用予定が入り、他の日程を検討するも調整が付かず、中止のやむなきに至った。

このため、地区文化祭は、コロナの影響もあり、三年間実施できていない。

それぞれの専門部は、独

自に活動していたが、その集約としての地域住民への発表の場が、長期にわたり提供できなかったことは、残念としか言えない。

地域住民からも残念という声があり、来年こそは、盛大に文化祭を開催したいと思っている。

さて、地域の専門部活動は、次第に高齢化の波が押しよせてきており、若い人達に参加してもらうにはどうしたらよいかが課題である。

日常の活動はそれぞれの専門部や単位団体の会員募集活動に委ねられるが、地区文化祭を地区文協構成団体の発表のみでなく、地区内の幼稚園・保育園の参加を要請するとか、地区外などからの応援出演を頼む等の工夫が必要なのかもしれない。

このような工夫によって地区文化祭を盛会にして、地区文化協会の専門部活動を若い力の応援を得て活発にしていきたいという、切なる希望を持っている。

コロナにも負けず！

池田地区
窪田ゆかり

舞踊部の活動は、コロナで一時中断されましたが、公民館が使用出来る様になってから、しっかり感染症対策を行いながら、通常通り活動を再開しました。

コロナ禍での一番の心配事は、部員の皆さんの足腰が弱くなってしまう事でした。なんといっても舞踊は、足腰だけでなく、頭も使い、指の先まで意識するため、筋力温存、認知症予防にも最適だからです。

今回はマスク着用でしたが、三年ぶりの文化祭！開催に向けてご尽力頂いた皆様には心より感謝！舞踊未経験の新入部員さんも一緒に、今まで温めてきた踊りを披露する事が出来ました。久しぶりの発表の場に、全員緊張と喜びを感じていました。

高齢かもしれませんが、心は若く！頑張ってる部員の皆さんを見ていると勇気をもらえます。

今後は、少しずつでも仲間を増やしながら、日本の伝統文化を楽しみながら、健康のために明るく楽しく、ゆるゆると、活動を広げ、コロナに負けない体作り、年齢に負けない体作りを続けていきたいと思います。

現在、西公民館を中心に、水曜日の午前中に活動をしています。未経験でも心配ありません！地域の皆さんと楽しく活動が出来る機会を作っていきたいと思っています！

コロナ禍での文化祭にて

春日地区
井上　みや子

春日地区では、第三十七回の文化祭と健康祭りを十一月二十日に作品の展示のみで開催いたしました。茶道部のおいしい一服のお茶から一日が始まりました。

専門部は、合唱・フラダンス・川柳・写真・レクダンス・民踊・手芸・園芸・料理・書道・着付け・茶道等です。

どの部も楽しみながら、活動しています。発表の部は残念でしたがコロナのために出来ませんでした。

展示では、専門部の力作や個人の絵や書、手芸等すばらしい特技の作品を出品されました。

合唱の部では、小林さんのウクレレと、小宮さんのヴァイオリンのすばらしい伴奏で、毎月一回、昔の歌や童謡を楽しく歌っています。

川柳は、「うら春日」で偶数月に勉強会を行っています。山日にも掲載されています。

健康の大切さを知ってもらうため、保健士さんと食生活改善推進員とで、血圧や握力・体重・身長等の測定を行いました。

来年は、有意義な文化祭のできる事を、心から願っています。

三年ぶりの文化祭

羽黒地区
山下　知

羽黒地区では令和四年十月三十日に甲府市北公民館において第三十一回文化祭を開催しました。

永年羽黒地区文化協会の会長として、すべてを取り仕切ってくださった中村瑞夫前会長の引退により、何かと不手際も多く反省点も多々ありましたが、役員及び会員の皆様のご尽力により和気あいあいと三年ぶりの文化祭を楽しむことができました。

二階の大ホールでは、フォークダンス・コーラス・太極拳・歌・フラダンス・大正琴・ハーモニカ・邦楽・朗読・オカリナ・太鼓、さら

に、特別参加でマリンバとフルートの姉妹演奏などの出演が続き、大いに盛り上がりました。

更に、二階の多目的ホールでは、盆栽・干支の壁飾り・トールペイント・お楽しみのおみくじ・川柳・俳句・編物・写真・油絵・湯村温泉紀行文等の作品が展示され、一般来場者の興味を引いていました。

ここ三年ほどのコロナ禍の中で、練習も製作も発表もままならぬ中でも、皆さんしっかりとそれぞれの文化活動にも力を入れてこられたことが伺えて暖かいものを感じさせられました。今回はとにかく文化祭を開催することを最優先とし、簡略化・経費削減・関係者の負担軽減を念頭に計画を進めましたが、次回は今回の不行き届き点を反省材料として、参加者の方々のやる気をより熱くさせられるお祭りにできればと思っております。

関係者の方々のご尽力に感謝し、次回に向けて地域の皆様のご支援ご協力をお願い申し上げます。

文化祭を終えて

甲運地区
寺田　義雄

私が文協に関わらせて頂くようになったのは三年前、前写真部長の後任として活動を始めた時である。入会時は、コロナの感染が広がり始めた時期で、最初の仕事は、会議で確認された「文化祭中止」のお知らせを伝えることであった。

コロナ感染者の推移が毎日報道されているが、コロナに負けるわけにはいかない。開催するにはどうするか検討を重ね、実施することになった。感染対策を徹底しながら、例年参加していただいた地域の諸団体の皆さまには事情をご理解いただく中で、従来三日間開催していたのを一日に短縮し規模も縮小して、会員だけの参加ということで開催となった。

前日の準備では町内の有志が率先して会場設営に駆けつけてくださり、当日を迎えることができた。

開祭式では甲府市文化協会会長（樋口雄一市長）、地区選出の寺田義彦市議等にご挨拶を頂き開催した。

発表部門では大正琴の音色、舞踊の身のこなし、詩吟の声量などに感銘を受けた。展示部門では絵画の色彩や筆遣い、ちぎり絵の微小な一片一片の配置、書道の筆の運び、写真の構図とバランス等それぞれの作品の大切な要素とポイントなどを学ばせて頂いた貴重な一日であった。

残念なのは、三年前には七十数名の会員であったのに三十数名まで減少し、市内でも下位の規模になってしまったことである。

コロナによる活動の低迷と会員の高齢化によることは否めないが、今後は会の若返りを図ることが課題である。

文協の発表に参加して

大国地区
橋本　朝子

大国地区文協では、コロナ禍の中ささやかではありますが三十周年の祝を迎えました。

この文協の「朗読部」へ加入させて頂き早十年が経過しました。地区での活動の仲間は三名です。

「朗読部」では大国地区と大里地区の朗読愛好の方々が集い指導者を中心に月に一回の学習会をもち、その成果の発表会や高齢者施設への慰問、子育て支援の会への紙芝居、手遊び等活動を重ねて参りました。

それらも新型コロナウイルス禍による活動の制限を受けているところです。

地区文協への加入と同時に「朗読部」として文化祭へ発表の機会を頂きました。

しかし文化祭への発表の場には、舞踊、カラオケ、絵画、書道、手芸等の展示など生涯学習での学びの成果の発表でもあります。

このように、にぎやかな会場で「朗読」という表現をどのように皆様に伝えていくか、傾聴して頂けるか、台本の選択も大きな課題です。「この文節、この言葉」を観客の皆様の心にも届けたい。そんな思いでの発表ですが、会場は広い体育館の中、地域の皆様との久々の出逢い、サークル仲間の楽しい会話、談笑は会場に広がっています。朗読の環境には向いていないのではと落ち込んでしまったりします。進行係の方が興味や関心を引けるような雰囲気づくりもしてくれました。

大国文協をとおして発表の機会を得たことへの喜びと、聴いて下さった皆様へ心が豊かになって頂く事が出来たのなら幸いに思い、今後の発表活動をとおして精進して、大国地区への文化の灯が大きく栄える事を祈ります。

文化祭によせて

北新地区
山口栄子

昨年、執行部の方からのご推薦で、民謡舞踊の部長をお受けしました。

これまでも文化祭には参加させていただいていましたが、これからは役員としてお役に立ちながら参加させていただきたいと思っています。

今まで当たり前のように思っていた文化祭。思いおこせば・・・。

体育館の玄関を入り最初に目に入るのは、淡い色合いの着物姿の茶道部の方々。お道具も黒塗りの衝立も立派なお茶席でお茶をお出ししている光景。

短歌、俳句、古布のリメーク作品、いけばな、書道、絵画、写真、手工芸、能面の展示があり見学者が楽しんで見ている光景。

そして、ステージで発表する朗読、フラダンス、吟剣詩舞道、カラオケ、大正琴リメークファッションショー、邦楽、踊り。客席からの拍手がある光景。どれも懐かしくなります。

これからも施設慰問、市文協舞踊部の事業、神社例大祭の奉納舞踊、他会との親睦発表会など活動していきたいと思います。そして来年の文化祭への出演を楽しみに稽古に励みます。

文協の皆様のご尽力により文化祭という「ふれあいの場」に参加できることに感謝しています。

現在に想う事

新田地区
切刀幸雄

新田地区文化協会は、今から二十五年前の一九九七年（平成九年九月六日（土））午後七時より九時まで新田小学校体育館にて設立総会を開催し、新田地区文化協会が設立いたしました。その翌年平成十年十一月一日（火）一日限りでしたが、十六部門で盛大に文化祭を開催いたしました。初めての事で各部の会員さんは、舞台の上で失敗したらどうしようとか緊張の連続ではなかつたかと思います。無事に何事もなく終了することができ皆さんホッとしていました。

それから毎年十月の第四（土・日）にかけ令和元年十月二十六日（土・日）第二十二回地区文化祭まで継続してやってきましたが、令和二年三年四年とコロナ禍で廃部を余儀なくされた部、練習ができずにいる部等が、沢山でました。

世界的に見ますと二〇一九年十二月に武漢で第一号の原因不明の肺炎患者が発生し、二〇二〇年の二月十一日になり新型コロナウィルスと判明し、わずか二年半で世界で六億三千五百万人が罹患して、死者が六六〇万人以上という前代未聞の未曾有の災禍としか言いようがない状態が続いています。新田地区文化協会もここ二年開催できずにいましたが、三年振りに令和四年十一月二十六日に第二十三回新田地区文化祭を開催できます。

継続は力なりでやってきた各専門部、新田地区各種団体・新田小学校・県立支援学校・和告福祉会・光風寮・育成会等の協力のもと、心をひとつにし頑張ってきて開催できることになりましたことは大変うれしい限りです。

人生百年時代と言われていますが、具体的に百年といったらどの位の長さなのか、私たちが今いる地球から月までの距離は、三八四、四〇〇キロメートルあります。宇宙空間が歩けるとしましょう。一日二十一キロメートル歩いたとしますと甲府駅から中央線下りの穴山駅、上りだと勝沼駅の距離になります。月に到達するまで五十年かかります。また、月から地球に戻ったとしますと往復百年かかります。どう捉えるかはそれぞれ皆さんの考え方次第ですが、一日一日を大切に生きていきたいものですね。マスクを外し、窮屈な生活から一日も早く抜け出し、戦争も終結し、前のような平和な生活が送れる時が来るといいですね。

もしコロナが第八波に突入した場合は、第二十三回文化祭は残念ですが中止いたします。

地区文協の活動に思う

中道地区
松野賀興

コロナ禍で心配された第四十八回甲府市民文化祭は無事盛会裡に終えることが出来た。十月三十一日は会場南側玄関総合受付午前の部を他地区の方と担当し、

受付業務の傍ら四方山話の中で情報交換をすることが出来、文協の今後を考える有意義な交流の場になった。

話の中でお互いの共通する問題点は、①コロナ禍においての活動の制約と②高齢化による会員の減少であった。①についてはコロナ対策「三密」による制約で通常での部屋や会場の活動や発表が出来ず、意欲と張りあいが減退してしまったこと。②については若い（五、六十代！）世代の新規加入者と指導者の減少であった。

恒例だった中道地区文化健康ふれあいまつり文協文化祭は三年間中止を余儀なくされたが各部は防疫に留意し活動内容を工夫しながらよくがんばっていると思う。その中でこの三年間発表活動をしている例を紹介したい。

文協菊花部と山野草花木部合同発表会で、十月二十九日（土）中道公民館前庭で行われた。一年間の労作が見事に花開いて観客を喜ばせ、同好の仲間と共に親睦を深め楽しみ、甲府市からの各賞で称え合った。地区の特色を活かした催しである。

以上のことをふまえ、これからの文協活動で心がけたいと思うことは、

一、各地区間の情報交換とその情報を活かすこと。

二、高齢化対策若いグループづくりへの喚起。

三、低い男性会員比率の改善

次の四に期待したい。

四、文協活動の魅力と生き甲斐（同好が集まり、共に高め合い、親睦と社会貢献を相互に楽しみ、そして良い足跡を残す）の体験を口込みで伝え広めて行くこと。

改めてテーマ「次世代へ輝く文化　引き継ごう」を考える一日となりました。

「声」の成長

大里地区
田口　喜代子

室町時代の能役者である世阿弥は「（演劇役者というものは）一声二振り三姿だ」という言葉を残しています。「朗読」もその一端だとしますと、聞いてくださる人に伝わる朗読をするためには、第一に良く通る声を学ぶことが大切だということになるでしょう。

私が切実に発声の大切さ、必要性に気付いたのは、マイクを使う仕事から離れ、若い時からの夢であった朗読を学び始めた時からでした。そして、教室では、始めの十分くらいは必ず発声練習を行いました。自分の声の変化に少しづつ気付いてきたみなさんは、お腹やのどに手を当てて、苦労しながらもレッスンに励んでくれました。

そんなレッスンの楽しみや努力が途絶えたのは、三年前のコロナ禍の発生時からでした。コロナ感染の必要条件である「三密」のすべてが揃ってしまっている朗読のレッスンの見合わせは、いつ果てるともなく続いてしまいました。部員のみなさんには、朗読技術を見直すプリント、エッセイ、短編小説などを何度かおくり、「黙読でなく、声を出すことを実践していきましょう。」を合い言葉に家庭での学習をお願いしてきました。

去年の春頃、「秋の地区文化祭に向かって発表するものを決め、少しずつレッスンを再開してみましょう。」と申し合わせた直後にまたコロナの情勢が変わってしまいました。

でも大事な「声」は誰にも奪われるものではありません。コロナで多くの体験を積んだ分、味わいのある深い声が身についてきていることでしょう。

石田文協女性レクリエーション部の歩み

石田地区
山田　康子

私たち女性レクリエーション部が石田地区文化協会に所属となったのは九年前でした。まだ歴史の浅い部ですが、それを感じさせないくらい、部員の皆さん頑張って活動しています。

それぞれ忙しい中、週に一度の踊りの練習にはほとんどの方が参加してくださっています。

「人と人との和」を大切に、心と身体の健康のためにと、踊りの基本は崩さずに親しみやすい曲で楽しく、時には厳しく稽古に励んでいます。

活動として年に一度の地区文化祭への参加や、高齢者施設の慰問を行っております。特に慰問先で施設の皆さんに喜んでいただける事は、私たちの元気の源となっています。これからも皆様のご支援、ご協力をいただくと共に、部員全員で石田文協の発展につながるように、楽しみながら頑張っていこうと思います。

現在部員を募集していま

す。私たちと一緒に楽しく踊ってみませんか。お待ちしております。

小さな社交場
伊勢地区悠遊館

伊勢・住吉地区
後藤恒子

十五団体（十名前後、会議は月一回七団体、二十名から三十五名）年度変わりには各自治会の総会などにも使用されています。又、年九回開催される「いきいき」サロンには六十名近い参加者で大変なにぎわいです。この地区は市内で高齢者比率は高いですが元気な高齢者が大勢住んでおられ、この小さな悠遊館を憩の場所として喜ばれています。多くの方が利用するため、場所の予約も大変です。月一回調整会議を開き代表者がくじ引きで予約をしています。

コロナのため、ここも休館になり練習も思うように出来ませんでしたが、少人数でも文化祭をやってみようとの声が上り、急きょ準備に入り、コロナ対策には十分気を配り、十月十六日伊勢小体育館で、伊勢・住吉地区文化祭が催され日頃の練習が実を結び素晴らしい多種多大な演技で、久しぶりに元気を頂きました。

令和になり世の中が急速に変りデジタル化が進み、人との繋がりがうすれ、古いしきたりが少しづつ消え、さみしさを感じます。

このような時代だからこそ、町の皆んなで大いにこのような場所を利用し、元気でいたいものです。

事務局から

令和4年度 定期総会

新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、参加人数を制限し、十分な感染症予防対策を講じた上で、五月二十日、定期総会を開催しました。

新旧年度の予算・決算、事業計画・報告、補欠役員が承認されるとともに、長年本協会の発展に寄与されました皆様のご功績に対し感謝状を贈呈するなど、コロナ禍においても、市民文化団体、各地区文化協会が気持ちを一つに集結し、行政との連携をさらに強化しながら、本市の郷土文化の振興と芸術文化水準の向上、会員相互の交流・協調を図っていくことが確認されました。

日時
令和四年五月二十日(金)
午後一時三十分

会場
甲府市総合市民会館
芸術ホール

令和四年度 第四十八回 甲府市民文化祭

テーマ 次世代へ 輝く文化 引き継ごう

コロナ感染症の影響で、令和二年、令和三年と中止となっていた市民文化祭の、三年ぶりの開催に向けて、令和四年七月二十七日（水）市民文化祭実行委員会総会（第一回）を実施し、設置要綱、役員の選任、基本計画・実施計画等の概要について協議を行い、承認されました。併せて、コロナ感染症対策を徹底する中で、皆が一丸となって、今年こそは文化祭を実施することを確認しました。

開催期間中は、会員の方々により献身的にコロナ感染症対策や案内業務等を実施していただき、また、多くのご参加いただいた市民の皆様にもご協力をいただき、安全安心のうちに、開催できました。

展示部門においては、樋口雄一会長の水石「釜無川滝石」の作品も展示され、また、青少年作品部門を含め九部門が、それぞれ作品を展示し、各部門の特徴を生かした展示は、見ごたえある成果を示しました。

発表部門においては、コロナ感染症対策として、舞台上での距離の確保などに配慮しながらの発表でしたが、伝統文化の良さと華やかな舞台は、日頃の研鑽の成果を十分に発揮するとともに、客席の皆様にも深い感銘をもたらすものとなりました。

日常生活が不安で、一層の行動制限や緊張感を伴う時間が続く中で、あらためて文化芸術の大切さを再認識し、その文化芸術活動の発表の場として、また、多くの市民の皆様に文化芸術に触れていただく場として、「市民文化祭」の意義や、開催できることの喜びを感じることができました。

文化祭開催期間

令和四年
十月二十九日(土)
～十一月十二日(土)

文化祭開催場所

甲府市総合市民会館
・遊亀公民館

展示点（人）数
九部門　六八八点

出演者数九部門
一、〇八一人

来場者数延べ
六、〇二九人

▲ 開幕式

▲ 合奏

▲ 合唱

▲ 能楽

▲ 演劇

▲ 吟剣詩舞道部

▲ 舞踏部

▲ 邦楽

▲ 民謡

▲ 茶道

▲ 写真

▲ 書道

▲ 盆栽

▲ 華道

▲ 工芸

▲ 水石

▲ 美術

▲ 文学

▲ 表彰式

文化祭賞・奨励賞受賞者

文化祭テーマ最優秀賞
矢崎和子

文化祭賞・奨励賞受賞者

◎美術部門
文化祭賞　冨山武男
文化祭奨励賞　地場正樹
堀内明
小笠原利子

◎書道部門
文化祭賞　網倉直美
文化祭奨励賞　安永美世
茅野三千代
石川陽子

◎写真部門
文化祭賞　中村瑞夫
文化祭奨励賞　関本弘
飯島信夫
井出ひとみ

◎文学部門
文化祭賞　米山房子
文化祭奨励賞　大勝雅子
藤原時男
望月貴美子
渡辺さちえ

◎水石部門
文化祭賞　大野浩伸
文化祭奨励賞　中澤健

◎盆栽部門
文化祭賞　沓間妙子
文化祭奨励賞　樋川直哉

◎工芸部門
文化祭賞　大野和子
文化祭奨励賞　眞壁遂呼
久保田小夜子
内藤佳代子

文芸こうふ 第二十九号発行

令和四年度
第四十八回
甲府市民文化祭作品集

三年ぶりの開催となりました、今回の文化祭には、コロナ禍で制約を受ける中であっても、日々、文化芸術活動に取り組まれてこられた会員の皆様方の、ブランクを感じさせない、作品展示の数々や、日頃の研鑽の成果などを発表いただく中、延べ六、二〇〇人を超える多くの来場者の皆様に、文化芸術の魅力を満喫して頂けたものと思います。

その第四十八回甲府市民文化祭作品集「文芸こうふ」が、発行されました。

市民文化祭において数多くの作品と魅力的な公演が発表された成果が掲載されています。

令和五年三月発行

文化講演会

本市は令和元年に開府五〇〇年、そして、一昨年は信玄公生誕五〇〇年を迎え、そして、本年四月十二日には、信玄公没後四五〇年を迎えます。

この信玄公没後四五〇年を記念し、甲府の歴史を学ぶ良い機会として捉え、講演会を通して甲府の歴史・伝統文化等を知ることにより、今後の甲府市文化協会の活動へ繋げることを目的に、文化講演会が開催されました。

開催日時
令和五年二月十三日（月）
午後一時半から午後三時

会　場
甲府市総合市民会館
芸術ホール

講　師
平山　優　氏
武田氏研究会副会長

演　題
「武田信玄公の生涯
～没後四五〇年を
記念して～」

出席者
約　二百名

甲府市文化協会に加入しませんか!!

本協会は、市民文化団体、各地区文化協会の連絡協調を保ち、自主的な文化活動を助長し、郷土文化の振興と甲府市の文化水準の向上を図ることを目的としています。

現在は、十八専門部と二十六地区文化協会が、学習と研鑽を積み重ね活発に活動しています。

専門部は、各分野に精通した同じ目的を持った団体（者）が市内一円から集まり、自主的な芸術（創造）文化活動を継続して行い、甲府市の郷土文化の振興と発展に努めています。

地区文化協会は、市内の小学校地区に設立され、生活文化活動を通じて、住民相互の親睦と交流を図るとともに学校と連携・結びつきを深め、地域の活性化を図っています。

文化活動に関心のある方、これから学習したい方、一緒に活動しませんか。お待ちしています。

詳しいお問い合わせ先は、
甲府市文化協会事務局
Tel　055（223）7329
甲府市文化協会ホームページ
https://kofu-bunkyo.com

令和四年度
甲府市文化協会 顧問・役員氏名

顧問　宮島 雅展
会長　樋口 雄一
筆頭副会長（専門部）
華道　鶴田 一杳
副会長（専門部）
工芸　奥山幾代子
吟剣詩舞道　矢崎 吼隆
舞踊　中澤 緑
副会長（地区文協）
穴切　宮澤 忠治
甲運　下出 祥司
伊勢・住吉　森田 芳弘
千塚　小笠原正人
副会長（生涯学習室長）
林　勝

【理事（専門部）】
華道　小林 明美
工芸　石川 顕
写真　広瀬 修
書道　矢崎 美咲
水石　水上 強
美術　古川みや子
文学　深澤 弘
盆栽　小泉 泉
演劇　渡辺 政幸
合唱　岡田 恭子
合奏　遠山 忍
吟剣詩舞道　山縣 清博
茶道　鶴田 宗慶
能楽　佐藤 眞弓
舞踊　保坂とみ子
邦楽　寺本 加声
民謡　相川 宝楽
洋舞　三井 環

【理事（地区文化協会）】
大里　芹澤 千束
石田　吉澤 一家
琢美　深澤 芳次
千代田　末木 幸造
里垣　福田 勝子
貢川　高田 宣雄
相川　八田 孝仁
東　原野 五郎
国母　小坂フキ子
山城　藤田 亮
玉諸　戸澤 清茂
新紺屋　勝村 武
朝日　服田 尚隆
富士川　立川 茂
相生　雨宮 秀
池田　松澤 栄二
春日　清水 明
羽黒　山下 知
大国　内藤 宥一
北新　米山 幸雄
新田　切刀 幸雄
中道　松野 賀興

【理事（生涯学習課長）】
森本 陽子

【監事】
書道　小川 晴翠
穴切　丸山 文雄
教育総室長　田村 邦彦

【事務局】
事務局長　早川 守
事務員　横山 弘美

あとがき

コロナに明けコロナで暮れたこの三年間、各地区文化協会の行事も思うに任せず、混迷の連続で、疲弊しきった中、昨年は第四十八回甲府市民文化祭が開催され、一縷の望みに灯を点し次回への期待が膨らんだ感の一方、展示数並びに入場者の減少に一抹の不安を覚えました。コロナ禍が一因であることは、言うまでもありませんが、会員の高齢化により、活動の縮小を余儀なくされた面も多々あることは事実です。こんな状況から脱却すべく、文化祭を見直す時期が来たように思います。

参加者の低年齢化と、一般客の動員を図るための具体策、展示に拘らず楽しさを加えたイベントの開催、例としては、時間を決めて総合市民会館の「イベントモール」を活用し、小学生による「二〇二三ソーラン」とか・高校生の女子書道部による文化祭のテーマを書するパフォーマンス等、知恵を出し合えば種々生まれると思いますが、いかがでしょうか。文化は、必ずコロナを駆逐します。

渡辺 優

〈表紙の写真説明〉
甲府市立動物園休園
開園から百三年間、市民に親しまれた動物園は施設の老朽化に伴い、十月三日休園、再整備工事が始まり四年半後の二〇二七年度にオープン予定です。
―写真副部長　坂本香一―

お手元へ配布された機関誌は大勢の方にご覧頂けるように、会員・友人・知人等へお配りください。

編集委員会

委員長　渡辺 優
副委員長　深澤 弘
委員　奥山幾代子
同　下出 祥司
同　広瀬 修
同　森田 芳弘
同　矢崎 吼隆
同　矢崎 美咲
（以上五十音順）

TEL 055（223）7329
FAX 055（235）5648

令和五年三月一日発行